

2024/7/30

リトルハウス通信

先日、ピアサポートについて調べていたところ、とても秀逸な論文「ピアサポートの不思議な力」（相川 章子：2022）と出会うことができました。この論文には、筆者の実践知と研究知から紡ぎ出された貴重な「言葉」がたくさん詰まっているものでした。それは就労継続支援 B 型事業所という「場」においても非常に有用性を帯びた「言葉」の数々だと強く感じた次第です。

そこで、今月と来月のリトルハウス通信では、この論文の感想と共に、私なりに学びになった点について少し書いていきたいと思います。

相川はピアサポーターについて「同様の経験をしている対等な仲間同士の支え合いの営みのすべて」と定義しています。この定義で大切なポイントは「対等な仲間同士」という点でしょう。

それは『支援の「場」では、「支援する側—される側」という固定化した役割が存在し、その「場」に身を置くやいなや、「能動—受動」の態が規定され、そこから抜け出すことは難しい』（相川 2022：152）と述べている通りです。日常的に「支援者」としてリトルハウスに身を置いている私自身、相川が述べているこの構造の中にスッポリとハマっています。

「支援者」という存在は、「クライアントの安心できる場」を確保する役割として必要不可欠だと私は考えます。北川は「安全で脅かされず、自由なままであることを許容されていると感じ取れる場が必要となる。この時、初めて自分のこれまでの経験とは異質な経験の存在が認識でき、そのような経験を自らのうちに受け入れようとする柔軟な自分になる可能性が生じてくる」（北川 2017：15）と、「場の安全性」に着目し「その場において支援をすることの意味」を論じている通りです。

しかしながら、そこから先、クライアントがリカバリーの道のりを歩む上で、支援者の存在は「やや役不足」と言わざるおえないでしょう。

ではなぜ支援者（言い換えると専門職）が、「やや役不足」なのかということになります。それは当事者とピアサポーターとの対等性を紡ぐ「経験の語り」の中にこそ、リカバリーに必要な要素が含まれており、そこには「中動態の世界」が広がっているということが、この相川論文に綴られているのです。

そこで次回のリトルハウス通信では、この「中動態の世界」についてももう少し詳しく記載していきたいと思います。

■引用文献

北川清一/久保美紀編著（2017）ソーシャルワークの招待 ミネルヴァ書房 15

相川章子（2022）ピアサポートの不思議な力 日本精神保健福祉士協会誌：JJMHSW 53(2)